

# 研究所報

No.49

2006. 10. 1.

## 目次

「衆縁の募、斧斤の力」を尋ねる	1
2005年度「指定研究」研究経過報告	2
2005年度「一般研究」研究結果概要	9
学会参加報告	14
研究調査出張報告	17
「蓮如：現代日本仏教のルーツ」出版について	20
彙報	21

## 「衆縁<sup>しゅ えん</sup>の募<sup>つりの</sup>、斧斤<sup>ふ ぎん</sup>の力<sup>つとめ</sup>」を尋ねる

真宗本廟(東本願寺)造営史研究チーフ 教授 木場明志

本年度から「真宗本廟(東本願寺)造営史研究」がスタートしている。2011年に親鸞聖人750回御遠忌が修せられることを機縁とする、真宗大谷派からの研究業務委託によるプロジェクトである。真宗本廟の創建から今日までの歴史、殊に東本願寺として別立する江戸時代以降の、4回の焼失を含む6回の造営について、信仰史・作事史・建築史の3方面から、史料に基づいて考究を進める計画である。

本願寺が東西に分派するのは1602(慶長7)年の徳川家康による教如上人への寺地寄進であるが、早速にその後2年間で造立された東本願寺両堂(御影堂・阿弥陀堂)は、いかなる規模だったのであろう。御影堂の敷地面積が現在規模に近い巍然たる大堂に拡大されるのは、1658(明暦4)年の建て替えである。建て替え理由は、寛文元(1661)年に迫った親鸞聖人400回忌厳修のためであるが、仰ぎ見る者を圧倒する大建築となった背景までは解き明かされていない。

たとえば、世上、先に造営されていた西本願寺より大きくしたい意向があったと囁かれる。とすれば、西本願寺が東本願寺を意識しなくてよかった時分からなぜ大堂を築いたのかも解明される必要がある。門徒数が抜群に多かったからというだけでは説明になっていない。儀式執行に際する参加僧侶数や、年中行事への上山門徒数の見当が試算されたのであろう。造営費用を負担するのはほかならぬ門徒であり、それを組織する地方僧侶の動向も反映して当然であろう。従来は、すべてを本山が仕切ったとし、宗主の威光に収斂して語られたふしが多い。本研究では、門徒・僧侶・本山作事組織・責任分担・各種職人・宗主などをキーワードに、作事の種別に則して造営事業の進行経緯を追うことが心掛けられる。用材寄

進一つにしても、どこで寄進の勧めが言い起こされ、どういう手続きを経て門末に届くのか。そして、門末の相談はいかに行われ、用材の選定から伐採・運送までの実際の態勢はどのように生まれ、門徒がどう参加し、どのように進行していくのかを見ていく。

かくいうのは、近時、その辺りの実際が随分見えるようになって来た。東本願寺所蔵史料の調査は過去18年に亘り続行されて終盤に至っているが、その6万点以上の古記録中に、本廟造営史関連史料が6千点近くも含まれていた。今回のプロジェクトはその活用の上になるものである。また、棟梁による、大工ほかの諸職人参画に関する具体的記録も驚くほど多く残ることを反映させる。

標題の「衆縁の募、斧斤の力」は、天明8(1788)年の京都大火による類焼(全焼)からの立ち上がりに使われた用語である。仏縁を結んで多くの人々の志(資金・物資・労力)を募る継続的な日常、および諸職人を含む日々の作事への励みが、再建を成就させたとするのである。尋ねるべきは、各造営における「終縁の募、斧斤の力」の内容である。信仰発露形態・作事組織・建築技術の3方面を重視するのはこのためである。

今回の本廟造営プロジェクトは、学外の建築工学研究に関する第一線研究者の方々に加わって戴いていることにも特色がある。東本願寺の建物のどこに建築学的な特徴があるのか。度重なる造営によって何が改良され、どこに無理が生じているのか。これらも重要な分析対象であろう。

真宗本廟は門徒の精神的帰依処である。その造営の歴史を尋ねる作業は、そのまま「親鸞聖人のご教化による念仏の法義を相承していく拠点」の再発見と再評価に繋がる。

# 2005(平成17)年度「指定研究」研究経過報告

大谷大学親鸞聖人750回御遠忌記念  
特別指定研究

## 親鸞像の再構築

チーフ・教授 安富 信哉  
(真宗学)

本研究は、「親鸞像の再構築」という研究課題の下、今年度発足した。これは、2011年に迎える親鸞聖人750回御遠忌に向けて、これまでの親鸞研究を概観しこれからの親鸞研究に新たな展望を切り開くために立ち上げられた、御遠忌記念特別指定研究である。

親鸞聖人の御遠忌は、これまでに50年、100年の単位で大規模に行われてきたが、その折々に記念事業が催され、親鸞像が確認されてきたと言える。先の700回御遠忌では、その年出版された歴史学者、赤松俊秀の『親鸞』に代表されるように、当時の歴史学の成果を踏まえて新たな親鸞像が提示され、その後の親鸞研究に大きな影響を与えてきた。それから50年経とうとしている現在、親鸞研究の動向と親鸞思想を巡る諸状況は、真宗学や歴史学などの様々な学問分野や、現代社会、他宗教などとの関わりにおいて新たな展開を見せてきている。

よって、本研究では過去50年に渡る様々な親鸞研究の動向を整理・検証し、新たな視点からの親鸞像を描くことで、今後の親鸞研究に問題提起をしていきたいと考えている。

本年度は、まず2011年に向けて、どのような活動を行い成果を公表していくかについて検討会を重ね、具体的方策を話し合った。そして当面は、1. 史的な親鸞像の再検討 2. 文献目録の作成 という二つの研究課題を軸にして活動を行うこととした。

### 1. 史的な親鸞像の再検討

前掲の、1961年(昭和36年)に出版された赤松俊秀の『親鸞』は、本願寺三世覚如が制作した『親鸞伝絵』を骨格として、親鸞の消息や妻恵信尼の消息などの同時代史料と、南北朝期までに成立した諸史料によって、親鸞の実像に迫ろうと努めた実証的な親鸞伝研究である。

しかし近年、史実ではないとして研究対象から切り捨てられてきた様々な親鸞伝に注目した研究が登場してき

ている。そして、覚如以外の手になる親鸞伝についても、厳密な史料批判を行った上で利用すれば、新たな親鸞像を描きうる事が指摘されている。また『親鸞伝絵』以外の様々な親鸞伝の研究を通し、史実上の親鸞ではなく、「語られた親鸞像」を明らかにしていくことも、今後の親鸞研究において大切な意義を持つと言えよう。

よって本研究においては、親鸞像の研究を推進していくために、毎年度何名かの講師を招聘し研究会を重ねることとした。本年度は二人の先生をお招きして、研究発表を行っていただいた。

第一回目は、本研究班の嘱託研究員であり同朋大学非常勤講師である小山正文氏より「親鸞伝史料としての中世真宗絵巻」と題してご発表いただいた。鎌倉期に作成された真宗関係の絵巻物には、『親鸞伝絵』『拾遺古徳伝』『最須敬重絵詞』『慕帰絵』があるが、今回、その中で語られている親鸞の系譜についてお話をいただいた。親鸞の系譜についてはこれまで幾多の先学が論じてきたが、現在日野家の出身であると認められている。しかし、小山氏は、従来扱われてきた史料に加え、「熱田神宮宮司系図』『明月記』『吾妻鏡』などの史料を基にして、親鸞の父有範は、平氏の一門である「平有範」であると説を紹介した。この説に依れば、親鸞が日野家であるという系図は、覚如の創作であると考えられるのである。小山氏の報告は、真宗関係以外の史料を洗い直すことで、親鸞の系譜を再検討する余地が出てくるという問題提起をなすものであった。

第二回目は、神奈川県立茅ヶ崎高等学校教諭である塩谷菊美氏より「『親鸞聖人御因縁』の展開」と題してご発表いただいた。親鸞伝としては、本願寺系の『親鸞伝絵』があるが、今回の発表では中世から近世に渡る本願寺系以外の親鸞伝を通観していただいた。特に鎌倉期、『親鸞伝絵』とはほぼ同時期に形成されたと考えられる、荒木門徒に伝承された『親鸞聖人御因縁』を取り上げ、その展開をご報告いただいた。そして、中世に形成された本願寺系以外の親鸞伝が近世には大きな影響力を持ち、民衆の親鸞像の基盤をなしていたと指摘された。民衆の中で「語られた親鸞像」を明らかにしていく上で、重要な論点が提示された意義深い報告であった。荒唐無稽な内容を持つ親鸞伝を史実ではないと切り捨てるのではなく、そこに語られた事柄の意味を明らかにしていくことが、親鸞研究の新たな課題であると感じられた。

両研究会とも、参加した研究員や研究員以外の諸先生方から様々な意見が寄せられ、親鸞研究を進めて行く上

で意義深い研究会であった。今後、両先生の発表内容を何らかの形で公表していく予定である。

## 2. 文献目録の作成

前回の御遠忌以降、真宗学、歴史学などの様々な分野から、親鸞に関する著書・論文が研究成果として公表されてきている。このプロジェクトにおいては、親鸞の研究史を整理し、研究成果を資料として活用できるように、過去50年に渡る文献目録を作成することを目的とする。

本年度は、収録方法・収録範囲・掲載項目・公開の仕方など、具体的にどのような形態の文献目録を作成するのか検討会を重ねた。そして現在、以下の方針で作業を行っている。

### (1) 目録作成の原則

学術研究に資する目録であることを第一義とする。

### (2) 収録範囲

50年間 (1962~2011) の真宗関係の文献

### (3) 収録内容

- ・親鸞に関わる著述
- ・七高僧に関わる著述
- ・親鸞の直弟子に関わる著述
- ・真宗の基本テキスト

### (4) 収録する資料の分類

- ・単行本
- ・全集、叢書類
- ・論文 (学術雑誌に所載のもの)
- ・論文 (記念論文集に所載のもの)
- ・外国語による文献

### (5) 掲載項目

- ・書名論文名、著者編者名、出版社、発行年、分類など

### (6) 公開の方法

- ・インターネットを通じて利用できるようにデータベースを構築する。また、収録内容や掲載項目を吟味し、形態を整えた上で出版する。

情報の収集に当たっては、以下の資料を参照している。

- (1) 『仏教書総目録』(仏教書総目録刊行会・1983~現在まで)
- (2) 『親鸞大系 別巻』(法蔵館・1989)
- (3) 『真宗学関係 学術研究論文目録 (自昭和三十一年一月 至昭和四十四年十二月)』(龍谷大学大学院真宗研究会・1970)
- (4) 『真宗学関係研究論文目録 (真宗学別冊) (昭和44年~56年)』(龍谷大学真宗学会・1984)

- (5) 『真宗学関係雑誌論文目録』(龍谷大学真宗学研究会・1997)
- (6) 『大谷大学真宗総合研究所研究紀要』(大谷大学真宗総合研究所) 所収の文献目録
- (7) 諸データベース (GeNii・印度学仏教学論文データベース・NDL-OPAC など)

本年度は、1. 2005年度に刊行された単行本 2. 「学術雑誌」所収論文の一部 3. 「記念論文集」所収論文の一部 4. 大谷大学所蔵の全集 に着手し作業を進めた。今後、作成中の目録を適宜サンプルとして公表し、改良を加えていく必要があると考えている。

## 大学史研究

# 大学史関係資料の 収集・整理・公開

チーフ・助教授 織田 顕祐  
(仏教学)

### 【清沢満之研究に関する業務】

- ① 『清沢満之全集』未収録文献文字起こし作業について  
昨年度から『清沢満之全集』未収録文献の翻刻作業を継続していたが、和漢の文献に関しては5月時点で作業を終了した(1文献、フィルム2本)。引き続き、和洋混在の文献に取り掛かり、11月時点で和漢のほうが多量のものに関して、作業を終了した(5文献、フィルム12本)。引き続き、洋文の分量が多い文献に取り掛かり、(4文献、フィルム9本)終了した。合計10文献、フィルム23本の作業を行った。
- ② 『清沢満之全集』テキストデータ校正作業について  
昨年度から継続していた『清沢満之全集』テキストデータ校正作業は『全集』第六巻作業から始まり、全九巻の作業を7月で終了した。作業結果については、CD-Rにて保存した。
- ③ 『清沢満之全集』原稿の整理作業  
『清沢満之全集』の入稿原稿の整理作業については着手できなかった。種類を選別し、ファイルボックスに廃棄期限を書きたいと考えている。B4ファイルボックスで104個が存在する。また、その他の

資料類の整理の必要がある。

④清沢満之『臘扇記』の出版企画への協力

清沢満之『臘扇記』出版企画について清沢満之記念会との相談会（第1回会議10月14日於名古屋）に出席した。そして大学側と清沢満之記念会側とで出版案の検討会（第2回会議）を3月1日に碧南にて行った。二度の会議とも、織田顕祐チーフと加来雄之研究員が参加した。その二つの会議の間に、12月9日、12月16日に清沢満之記念会会長神戸和麿先生に『臘扇記』出版構成案をお渡しし、そして1月20日に神戸先生と加来研究員とで事前の打ち合わせを行った。研究班の作業としてはその構成案作成に関する下準備作業にあたった。『影印 臘扇記』（仮称）は記念館が担当し、『注釈 臘扇記』（仮称）は本研究班と共同で担当することを決定した。

⑤閲覧・質問への対応

閲覧・質問が延べ12件あった。企画室の1件を除き、全て学内教員によるものであった。写真の貸し出しなどを含む資料貸出申請書の修正を行う必要がある。

【佐々木月樵に関する業務】

佐々木月樵の研究のため、目録整備を行った。そして、作成した目録にしたがい、資料収集を行った。文献数584件中、289件を収集した。

【大学史研究関係資料保存に関する業務】

真宗学事研究・大学史編纂研究において収集された資料の整理と保存に関する業務を前年度に引き続きすすめている。

①学寮・真宗大学・真宗大谷大学・新制大谷大学時代の史料9000点余りの長期保存に向けた保管作業。

②写真史料の保管作業。

①は大学史所蔵史料として大学行政史料をはじめとする貴重な文書群の長期保存に向けた対応措置作業である。具体的には錆による史料への悪影響を回避するために、クリップやホチキス、ピンやセロファンテープなど金属系の留具を撤去、中性紙封筒にて史料を保護し、史料を横置きにして保存する措置をとっている。この作業は史料の劣化を防ぐだけでなく、移管作業において史料と既成データとの照合・再調査を行い、史料情報をさらに充実させている。②は、大学史所蔵の大型写真史料には貴重なものが多いが、従来は適正な保存処理がなされておらず、十分に把握されていなかったため、175点の写真史料をデジタルカメラで撮影し、閲覧・公開が可能な態勢が整っている。しかし小型写真については未だ十分な処置が施されていないので、小型写真の閲覧請求や

公開にも迅速に応じられる状況にするうえで、所蔵写真のデータベース化を進める課題が残されている。写真史料のデジタル化は、ホームページにて史料を公開する際にも有用であり、今年度も継続して整備を進めていくことを課題としている。

【近世学寮研究に関する業務】

当研究班の研究課題として、過去の「300年史」の研究成果について改めて確認をし、その観点から、近世における宗学考究の中心的機関であった「学寮」についてその重要性に着目する。前年度より継続する作業としては、まず主な内容として慶長以降の大谷派における講義・典籍・関連事項の記録等について年表形式でデータ化し（「大谷派学寮年表」）、さらに真宗教団における教学を歴史的な視点から把握するに当たっては、大谷派のみならず、本願寺派の「学林」についてもその流れを確かめる必要性が認められることから、「大谷派学寮年表」と同様に、『龍谷大学350年史』をもとに「本願寺派学林年表」のデータ化にも取り組み、明治33年までの人的組織、出版、事項などを一覧できる表を作成した。今後は研究に向けてこれらのデータを必携のツールとなしえるために、さらにデータ自体のチェックに時間を注ぐ。これらの年表は近代における大谷大学の成立に密接な関係がある近世学寮の景観復元を目的として作成された年表であり、今後はこの年表を活用して研究を進めていく。

従来の近世学寮研究は主として教学継承の視点を中心とするものであったが、それは大谷大学個別の真宗学研究における問題関心を有するものが中心であった。近世学寮の諸問題は大谷大学に接続される問題だけでなく、近世から現代にかけての歴史的、思想的変容過程における、学問や教育全般の問題でもあり、幅広い視点からの研究が必要である。

復元する方法には多数の論点があるが、本研究班ではまず五代講師で諸國に門弟を多数形成した「香月院深励」を中心に進めることにした。その理由は、①香月院深励の時期に、異安心問題や西派学林の三業惑乱をはじめとする教義認識に変化が見られること。②香月院深励の生きた文化文政期は、文化史的な視点から一時代を構成しているが、真宗教学史との関わりや香月院深励の学問・問題意識に時代がどのように関係しているかを問う意味と必要があること。③文化文政期以降、香月院深励のみならず宗乗以外の余乗・外学と称される学問が少しずつ見られるようになるが、新制大学が宗乗以外に余乗・外学を教育課程に取り込むべきがけとしての意味が文化文政期にあるのではないかと考えられること。④

明治10年～30年代にかけて、香月院深励の著作が盛んに出版されるが、それには一体どのような理由があったのか。さらにそれはどのように批判・継承されたのか。出版史や清沢教学との距離などを通して、近代真宗教学を考えなおす必要があること。以上の諸点である。香月院深励の著作目録はいくつか存在するが、完全なものが存在しないので、図書館の協力を得て、基礎作業として大谷大学図書館蔵の「香月院深励関係資料目録台帳」(欠本調査、版本(版元)・写本(書写者)、成立年月日、朱筆等書込)を作成中である。

#### 【他大学大学史編纂室との交流】

全国大学史資料協議会(西日本部会)に参加(詳細は『彙報』参照)し、他大学の学史編纂の現状と課題について学び、刺激を受けつつ、活発な議論や意見交換によって、今後の大学史研究のあり方を学んでいる。

## 国際仏教研究

### 諸外国における仏教研究動向の 把握と必要資料の整理・収集・公開

チーフ・教授 R.F.ローズ  
(仏教学)

#### 〈英語班〉

1. 真宗・仏教関連資料の英語への翻訳研究に関して、これまで伝えてきたように、近代真宗教学の代表的論文の翻訳を“An Anthology of Modern Shin Buddhist Writings”としてニューヨーク州立大学(The State University of New York)から出版予定であり、2005年もその作業にあたった。具体的には、清沢満之の翻訳を担当した、ニューヨーク州立大学のマーク・ブラム先生を招き、アンソロジー全体の序文の検討を行った。

またこれに加え、新たな翻訳研究にも着手した。清沢満之による「真宗大学開校の辞」(以下「開校の辞」)である。翻訳研究会に先立ち、田村晃徳研究員より、「真宗大学開校の辞をめぐって」と題された発表が行われた。その発表により、真宗大学が東京に設置されるまでのいきさつや、「開校の辞」文中に出てくる語句の確認が行われた。翻訳研究会はマイケル・コンウェイ本研究班補助員による「開校の辞」の英訳“Address for the Opening of Shinshu University”をもとに、研究員が意見

を述べる形ですすめられた。具体的検討会は2006年2～3月に集中的に開催され、完成をみた。2006年度の『真宗総合研究所研究紀要』に発表の予定である。

2. その他、国際学会への参加に関しては以下の通りである。

#### ①2005年8月31日～9月3日 於ウィーン大学

The 11th International Conference of the European Association for Japanese Studies (EAJS)

国際仏教研究班としてパネルを設け参加した。テーマは“Contextualizing the Pure Land Buddhist Tradition in Modern Japan”。

#### ②2005年8月29日～9月3日 於ロンドン大学

14th Conference of the International Association of Buddhist Studies

国際仏教研究の嘱託研究員でもあるマーク・ブラム教授が真宗の歴史意識について発表を行った。ロバート・F・ローズ研究員が参加し、参加者と交流を深め、情報収集に努めた。

#### ③2005年9月9日～11日 於武蔵野大学

国際真宗学会 テーマ「流動する世界と浄土教の可能性 “Potentiality of Pure Land Buddhism in the Changing World”」

国際研として“Shin Buddhist Responses to Modernity”と題するパネルを開催した。

#### 〈ドイツ班〉

1. 「プロテスタント神学との対話」を主眼として本学とドイツ・マールブルク大学との間で学術交流・共同研究が継続的に行われているが、本年度は2005年5月5日から8日までドイツのマールブルク大学において開催された第5回国際ルドルフ・オットー・シンポジウムへ参加するという形でその成果を公のものとした。今回のシンポジウムは「内的平和と暴力の克服―試練に立つ諸宗教の伝統」というテーマの下に開催された。これまでの「仏教―キリスト教」という対話の枠組みとは異なり、福音主義をはじめとして、カトリック、ユダヤ、ヒンドゥー、フェミニズム、チベット仏教、イスラーム、上座仏教、チベット仏教、そして真宗という様々な宗教的・思想的伝統を持つ参加者が、「宗教と暴力」の関係について発表を行った。参加者は、国際仏教研究班(ドイツ班)キャップの門脇健、研究員の木越康、井上尚実、吉田孝夫、藤枝真の5人であり、本学からの発表は、門脇健による「暴力と真宗におけるその克服」と、木越康による「真宗における〈悪人の自覚〉と救い」であった。聴衆の多くにとっては真宗そのものが初めて聴くものであったからであると思われるが、発表後の質疑応答

においては、真宗の歴史的成立経緯や社会的認知度といった基礎的質問が多くよせられた。

シンポジウム参加の他には、マールブルク大学神学部ディートリッヒ・コルシュ教授著の『マルティン・ルター』の翻訳作業が進められている。翻訳終了次第、出版という形での公表を計画している。

2. フランス国立高等研究院 (EPHE) の宗教社会学部部門との学術交流が具体化され、シンポジウムのタイトルや日程が決定された。

「大谷大学真宗総合研究所・フランス国立高等研究院合同シンポジウム：宗教と近代合理的精神——日仏文化の比較をとおして」(2006年11月30日・12月1日開催)

門脇健による基調報告「二つの世俗化」をはじめ、マイケル・バイ「現代日本における市民宗教」、藤枝真「現代日本の終末期医療における仏教と医療の関係」、井上尚実「地獄の喪失——宗教的宇宙観の衰退と日本の近代化」、阿部利洋「お骨と死生観——現代日本の葬送ビジネスをめぐる」といった発表が行われる予定である。また、EPHEからは、ジャン・ボベロ「現代フランスにおける政教分離と宗教」、セヴリーヌ・マテユウ「医療と宗教における死の世俗化」、ハルトムート・ロータモンド「万民にとっての神々とは何か——明治期における宗教と政治」、ジャン＝ポール・ヴィレーム「ウルトラモダンの文脈における宗教」の各発表が予定されている。

シンポジウムに先立ち、本学の各発表者が発表概要を説明する事前研究会を行った。日本とフランスという異なった社会形態・宗教的伝統をもつ発表者の間で、どのような議論が展開されるかについて活発な意見交換が行われた。

#### 〈中国班〉

中国東北地域 (いわゆる満洲) と東部モンゴル地域 (内モンゴル自治区東部) における宗教及び関連文化の諸相を、歴史史料による再構成及び現地調査によって明らかにするために、今年度は以下の研究活動を実施した。

#### 1. 大谷大学図書館所蔵真宗大谷派海外布教資料の目録作成

中国東北・東部モンゴル地域関連資料の目録作成作業に着手し、資料約500点 (仮番号1～7) の調査カード作成を完了し、なお旧満洲関連の綴資料 (仮番号8・9) の目録作成作業を継続中である。また、この目録作成に関連して、9月18日、木場 (研究員) および山本 (研究補助員) が中国布教および中国仏教研究従事者藤井静宣旧蔵資料の収集を目的に、資料所蔵先の藤井宣九氏 (豊

橋市在住) を訪問し、聞き取りを中心に調査を実施。さらに10月18日、木場および山本が資料所蔵先の真宗大谷派浄圓寺 (豊橋市) を訪問し、調査を実施した。今般の調査によって、豊橋空襲を資料疎開によって奇跡的に免れた資料群 (ダンボール箱35箱) が存在することが初めて明らかになった。調査の結果、資料は藤井静宣師収集の中国仏教関係書籍・雑誌・新聞類が大部分を占め、加えて、師が編纂にあたった『東本願寺上海開教六十年史』(1937年) に関わる資料群、および師による留め書き類が存在すると知られた。

#### 2. 中国東北師範大学との共同研究「中国東北・東部モンゴル地域の宗教と文化」の推進

9月4～6日、木場・桂華の研究員2名が中国東北師範大学を訪問。学長・副学長を表敬訪問し、共同研究の意義を確認。さらに、共同研究の中国側参加者5名と初会合を開き、具体的研究計画を討議。結果として：

- ①中国側の案内で東部モンゴル地域の現地踏査を実施する。
- ②中国側研究者が日本に在る資料を調査できるよう日本側は協力する。
- ③上記のいずれかの日程に合わせて共同研究会を開催する。
- ④研究期間終了後、研究参加者はただちに報告論文を大谷大学真宗総合研究所に提出する。

以上4点について完全合意し、研究期間は2007年3月までであることを了承戴いた。

## 西藏文献研究

### チベット語文献の データベース化

チーフ・教授 小谷信千代  
(仏教学)

本研究は、学内外のチベット語文献を調査・整理し、データベース化を進めることによって、チベット研究の基盤を構築し促進をはかることを目的としている。その目的を達成するために、2005年度は、以下の課題に取り組んだ。

- (1) 『大谷大学図書館蔵西藏大蔵経甘殊爾勒同目録』補訂1997年に完結した『大谷大学図書館蔵北京版西藏大蔵

経勸同目録』刊行事業は、本学チベット研究の軸をなすものであり、すぐれたレファレンスとして評価は高い。そのうち、1930～32年刊行の『甘殊爾勸同目録』(3分冊)は、刊行から70年以上経た現在でもその価値は全く失われておらず、仏教研究の根本資料として非常に重要なものである。しかしすでに絶版・入手困難であり、合冊復刊を望む声は大きい。本研究班ではそうした声に応える形で、数年前よりこの目録の一部電子化に取り組み、昨年度はコロフォン・テキストデータの構築を行い、完成したものをWeb上で公開した。

近年チベット大蔵経に関する研究の中でも、とりわけカンギュル(bka'gyur)部の成立過程や諸版・諸写本の関係に関する研究が盛んである。かかる現状に鑑み、今年度は、これまでに蓄積したデータや最新の研究をもとに、チベット大蔵経カンギュル部の研究への根本資料を提供すべく、『甘殊爾勸同目録』の復刻・合冊を目指し、補訂必要箇所確定をおこなった。

大谷大学図書館所蔵の北京版チベット大蔵経カンギュル部には、周知のとおり7函の欠函(第13・58・65・67・91・103・106函)がある。それゆえ、1930～32年刊行の『甘殊爾勸同目録』では、欠函部分に関して一切の勸同がなされていない(欠函部分はX葉とされている)。1955～61年に刊行された『影印版北京版西藏大蔵経』では、欠函部分をフランス国立図書館(Bibliothèque nationale de France)所蔵本から補充している。そこで今年度は、『甘殊爾勸同目録』刊行当時には参照されていなかった欠函部分について影印版を使用し補訂を行った。今後、目録の補訂・合冊のため、さらに行うべき作業があるが、欠函部分の補訂必要箇所確定作業は、ほぼ完了した。

## (2) 西藏社会科学院との共同研究提携交流とチベット(ラサ)木版印刷の現状

チベット文化の研究に際し、現地での調査および、チベット人研究者との共同研究の必要性はますます高まってきている。そこで2004年9月、研究員・研究補助員を北京およびチベット自治区ラサに派遣し、現地研究機関や西藏大学への訪問、研究者との面談などをおこない、10月には西藏大学学院講師ケツン氏を本研究班の嘱託研究員として招聘した。2005年度も、現地研究機関との共同研究体制構築、現地研究者との交流および現地調査を目的として、2005年8月、研究員・白館戒雲、三宅伸一郎、研究補助員・目片祥子の3名をチベット自治区ラサに派遣し、西藏社会科学院との交渉、および木版印刷の現状調査をおこなった。現地では嘱託研究員・井内真帆も合流し、ともに調査をおこなった。

西藏社会科学院との共同研究推進に関して、院長ツェワン・ギェルメー氏をはじめ、同院図書館の館長、所属の研究者らと面会した。さらに情報収集の一環として、2004年度嘱託研究員のケツン氏をはじめとする西藏大学関係者、さらに西藏図書館関係者とも面談した。

またラサにおける伝統的な木版印刷の現状調査では、ラサのメル(rMe ru)寺境内にある西藏仏教協会印經院や、その他寺院の木版印刷所での調査をおこなった。寺院にある木版印刷所では、セラ(Se ra)寺、デブン('Bras spung)寺のガンデン・ポタン(dGa'ldan pho brang)およびロセーリン(Blo gsal gling)学堂、ガンデン(dGa'ldan)寺、ヌブ・リクスム・ゴンポ(Nub rigs gsum mgon po)、ロ・リクスム・ゴンポ(IHo rigs gsum mgon po)などを訪れ調査した。また、現在ラサに存在する私営のパルパ(par pa, 木版印刷業者)のもとを訪れ調査をおこなった。

西藏社会科学院との共同研究交流およびチベット木版印刷の現状調査に関する仔細な報告は、「西藏社会科学院との共同研究提携交流とチベット(拉薩)木版印刷の現状」(「海外調査出張報告」『大谷大学真宗総合研究所研究所報』No.47、2005年10月発行、pp.27-31)に記載されている。

## (3) チベット・ヘイティジ・ファンドによる講演会の開催

1996年以降、チベット・ラサ旧市街の保護活動を皮切りとして、主にチベット建築の保護修繕、測量記録及び伝統技術者の育成に力を入れているNGO団体チベット・ヘイティジ・ファンド(Tibet Heritage Fund)の代表が来日し、本学で講演して頂く機会を得た。チベット・ヘイティジ・ファンドは文化遺産保護と振興において国際的な理解と協力を促進することを活動目的とした組織で、多様な国籍のメンバーにより構成されている。

2006年3月14日、本学響流館3階メディアホールにて、代表のピンピン・デ・アゼベード(Pimpim de Azevedo)、アンドレ・アレキサンダー(André Alexander)両氏、プロジェクト責任者の平子豊氏に、過去のプロジェクト内容をまとめて「チベットの歴史建築物の紹介—10年にわたる研究と保護活動を通じて—」という講題で御講演を頂戴した。ピンピン・デ・アゼベード氏は現在、モンゴルのチベット様式建築の研究・保護をおこなっており、アンドレ・アレキサンダー氏は、ラサのパルコルの保護活動にはじまり、アムド地方・モンゴル・ラダックにおいて歴史的建築物の研究・保護をおこなっている。また平子豊氏は現在、アムド・カム地方のチベット建築の研究と保護活動をおこなっており、三氏それぞれご講演頂いた。当日、講演会には学内外からの多数の聴講者

で盛況であり、講演会終了後は懇親会も催された。

(4)『インド・チベット仏教史』

2004年度に本学図書館所蔵チベット語文献ゲイエ・ツルティムセンゲ (dGe ye Tshul khriṃs seng ge) 著『インド・チベット仏教史 (rGya bod kyi chos 'byung rin po che)』(蔵外No.11847)の電子テキストをWeb上で公開した。2005年度は、『インド・チベット仏教史』校訂テキスト出版のため、西藏大学文学院講師ケツン氏にテキストの校正を依頼し、校訂テキストが完成した。さらに2006年度の出版を目指し、索引(人名・地名)を作成するため、テキストから、人名・地名を抽出し整理した。

(5)TLKのバージョン・アップ

MacOSX対応 Tibetan Language Kit (TLK) のバージョンアップのための作業をすすめてきた。残すはインストーラー作成のみとなり、作業はほぼ完成した。



# 2005(平成17)年度「一般研究」研究結果概要

## 共同研究

### 平安時代古記録の研究

研究代表者・教授 佐々木令信  
(日本仏教史学)

本研究は、大谷大学に所蔵され、国の重要文化財に指定されている、平安時代中期の貴族藤原資房の日記『春記』〔1巻〕長久2〔1041〕年2月条の研究を通じて、本史料の性格や特色を明確にし、また当該期の政治・社会・文化・宗教全般について解明することを目的とする。以下、本学所蔵『春記』の共同研究で得られた研究成果の概要を述べたい。

『春記』が記録する長久2年は、後朱雀天皇の治世下、藤原道長の長子で、宇治平等院を建立した藤原頼通が政権を運営していた時期にあたる。この時期は、他に現存する貴族の日記〔古記録〕が少なく、当該期の歴史を知る上で、早くから本史料は研究者の間で注目されてきた。本概要では、『春記』のこうした史料的位置付けを確認した上で、次に、『春記』の写本をめぐる研究について報告を進めたい。

『春記』については、藤原資房の自筆本は残念ながら伝わっていない。古写本として著名な一つが、東寺旧蔵本である。この系統の写本としては、本学所蔵本の外、宮内庁書陵部に8巻、京都国立博物館に3巻所蔵されている。東寺旧蔵本と並んでもっとも古い時期に書写されたのが、高山寺に所蔵される『春記』である。紙背は安元2〔1176〕年書写の「新編諸宗教蔵総録(義天録)」である。現存の古写本には、鎌倉時代書写の九条家旧蔵本5巻〔宮内庁書陵部所蔵〕・三条西家旧蔵本3巻(尊経閣文庫所蔵)・弘安10〔1287〕年書写の「无相大乘宗二諦義林抄」を紙背にもつ田中教忠旧蔵本1巻(国立歴史民俗博物館所蔵)・妙法院本1巻がある。本研究では、一連の写本の伝存状況を検討した結果、『春記』写本は、一つの系統から分かれて派生したのではなく、複数の系統の写本が併存して現在に伝わっているものであることを明らかにした。

さらに研究概要を述べていきたい。東寺旧蔵本・高山寺所蔵本・田中教忠旧蔵本のいずれもが、『春記』を料

紙としてその紙背に寺院の聖教類が書写されている事実は重要視すべきであろう。本研究では、本学所蔵本『春記』の類本である他の東寺旧蔵本を主たる対象として、この問題について検討を進めてきた。その成果について、次に概観しておくたい。

本学所蔵本の紙背には、聖教類が存在する。『春記』本文には、巻首が1紙余白をおいて書き写されていることから、本文が先に書写され、ついで、『春記』本文を料紙に用いて紙背の聖教が書き写し始められたが、しかし紙が不足し、1紙を継ぎ足したと考えられる。

他方、本学所蔵本の類本の内、宮内庁書陵部所蔵本8巻の巻3～巻7紙背には、「大日経秘要抄」5巻が書写されている。書写年代は巻5の書写奥書から永万元〔1165〕年と考えられる。この「大日経秘要抄」について、本研究では、石山寺校倉蔵の典籍を調査したところ、同じ「大日経秘要抄」の1巻・2巻の部分が残されていることが判明した。書写年代は巻1の書写奥書から治承5〔1181〕年と考えられる。また京都国立博物館所蔵本3巻の巻2紙背には、醍醐寺勝賢書写の奥書をもつ「如法尊勝法支度文書」が残されている。紙背の内容を検討したところ、『覚禅抄』と同一の内容をもつ文書が存在する事実を確認した。このことは、『覚禅抄』の記述の信憑性を立証するという点でも重要な研究成果といえる。

このように、本学所蔵本を含む東寺旧蔵本『春記』の紙背について、総合的に研究した結果、従来「大日経秘要抄」とされた本学所蔵本紙背をめぐるのは、いまだ検討の余地があると考えている。

本研究は、本文の内容についても検討作業を進めてきた。次にその概要について述べてみたい。

長久2年2月条からは、不明な点が多い藤原公任の死亡前後の動向、仏師定朝の活動などを知ることが出来た。また藤原頼通政権の蔵人頭〔藤原資房〕の活動実態が明らかになり、院政政権の蔵人頭の活動との比較検討により、両者の政権構造の違いの一端を解明することが出来たといえる。

以上が、共同研究「平安時代古記録の研究」の研究概要である。

共同研究

## 蠟管音源のデジタル化： 蠟管蓄音機の再現

研究代表者・助教授 山本 貴子  
(図書館情報学)

2005年度、真宗総合研究所一般研究の「蠟管音源のデジタル化：蠟管蓄音機の再現」において、北里蠟管資料についての研究を行った。

北里蠟管資料とは、北里闌氏が、日本語の起源について1920（大正9）年から1931（昭和6）年まで国内（沖縄、東北、北海道）および海外（台湾、フィリピン他）で調査した際、現地のことばを録音したものである。本学には、失われた言語を記録している蠟管が約230本と、記録と再生に使用された Edison 式蠟管蓄音機2台が存在する。これらは、極めて貴重な資料であるため、北海道大学などの研究者が、昭和61・62年度文部省科学研究費補助金総合研究(A)で音声の再生・解析を行っている。非接触再生法で再生・録音された音声を現在分析したところ、500Hzから1500Hzであった。

過去の文献によれば、蠟管に録音された音声は口述筆記用として使用されており、いくつかの子音が聞こえにくかったとは書かれているものの、この周波数より可聴帯域が広いと考えられる。しかし、それを証明するためには、録音・再生の精度を高めるとともに、蠟管蓄音機の修復も必要となる。

そこで、本研究では、現時点での蓄音機の精度の検証と、当時の蓄音機の精度の調査、蓄音機の修復と、修復が成功したかどうかの検証を行うことを目的とした。そのため、北里蓄音機と同型の蓄音機を購入し、1900年代初頭の蓄音機が、現在どの程度の精度を保っているかを実験・検証した。さらに、北里蠟管に録音されたデータを識別するために必要となる、北里闌氏が出版された図書の分析も開始した。

まず、接触法で再生・録音した蠟管データを解析した結果、現在でも100Hzから7000Hzが再生でき、本来、蠟管蓄音機は録音精度が高いことが明らかとなった。そこで、台湾関係の蠟管の中で状態の良いもの数本を選び、再生・録音した。しかしながら、カビやヒビのある蠟管を再生するので、蓄音機の針や振動版も劣化する。修復しながらの再生となった。さらに、当時の蓄音機がどの

程度の精度を持っていたかを資料などから調査した。

また、北里蠟管の状態について、台湾関係を取り上げ詳細に分析した。その結果、カビやヒビなどの蠟管自体の劣化もさることながら、たとえば、フィリピンの蠟管ケースに台湾の蠟管が入るなど、入れ替わってしまっているものもあることが分かった。また、ほとんどすべての蠟管には録音場所を表すラベルが付けられているが、そのラベルが入れ替わっている、あるいは、1本の蠟管に複数のラベルが付けられているものも少なくない。

さらに、北里闌氏のご子孫への聞き取りと、北里蠟管が本学に寄贈された経緯についての聞き取り調査を行った。その結果、ご子孫には資料が残されていないことが分かった。

一方、北里闌博士は、蠟管の録音状況を記録した図書を数冊出版している。まず、これらの資料のうち、『日本語の根本的研究』の台湾の箇所について、その内容を構造化した。ここには、録音内容などのほかに、交通手段や衣食住を含めた風俗・習慣などが、録音した順に克明に記録されている。また、北里闌博士のことばや現地の人たちのことばも、当時の発音をカタカナに置き換えたものが書き残されている。蠟管の音声とカタカナに置き換えられたものが一致すれば、80年前の音声も、録音した人の名前とともに甦ることになる。中でも、音声を録音した人たちの顔については、全員の写真が含まれていると考えられる。北里闌博士の蠟管の情報を同定識別するにはこれらの資料の分析を欠かすことができない。

これらの研究について、山本、片岡教授の両名で、2005年10月4日～7日に東呉大学で開催された“2005 The International Forum of Ethnomusicology in Taiwan”において講演した。その成果は、“2005 The International Forum of Ethnomusicology in Taiwan: Interpretation and Evolvement of Musical Sound Conference Proceedings”に、“How Can We Reach the Ancient Sounds by Edison’s Talking Machines?”（片岡裕教授執筆）と“The History and Contents of Kitasato Wax Cylinders- The Time Capsules”（山本執筆）として掲載された。

## 共同研究

## 法苑珠林の総合的研究

研究代表者・教授 若槻 俊秀  
(中国哲学史)

唐・道世撰『法苑珠林』一百巻は、既に散佚した翻訳経典や中国で作られた偽経が保存されており、漢訳仏典や、中国仏教学、仏教史の研究にも貴重な資料を提供する貴重な書である。また説話、伝奇類が多く収録され、文学研究の領域からも重要なものである。

しかしながら、本書は従来あまり研究されておらず、とりわけ体系的な研究はほとんど存在しなかった。そこで当研究班では、多方面の専門家によって本書を多角的に検討することを試みている。

当研究班では、本書の各篇または各部の末尾に置かれる「感応縁」に収録される仏教説話に検討を加えてきた。『今昔物語集』など我が国の文学にも多大な影響を与えたこれらの説話群を研究することで、中国および日本の仏教文学研究に寄与しようと考えられるからである。

本年度はまず、それらの説話のうち対象を斉・王琰撰『冥祥記』に絞り、全130余話について全文の校訂を行い、訓読・語注を施す作業を行った。『冥祥記』は魯迅の『古小説鈎沈』での輯佚・整理をはじめ、部分的な訳注も存在するが、いずれも不十分で問題点もおお多く存するので、新たに検討して本来の『冥祥記』の姿を考えることを目指した。

魯迅は『古小説鈎沈』において『冥祥記』を蒐集するにあたり、逸話の内容の時代順を以て排列しているが、いま我々はこれに拠らず、『法苑珠林』の篇・部の体例に沿って校訂作業を行ってきた。『法苑珠林』各篇における各逸話の位置づけを考えることによって、ひいては『法苑珠林』全書の体例および編集方針を明確にし得るからである。

具体的な作業としては、班員が分担して校訂・訓読および語注作成を行い、班員による会読を定期的に継続して実施することで、それらを検討してきた。ここには仏教学、中国文学、国文学、また哲学、語学など多分野の専門家が参加した。このことにより、我々は単に『冥祥記』の定本策定という目的だけにとらわれることなく、

多角的な分析を行うことが可能であった。会読を通じ、それぞれの説話に表現される仏教観や日本文学との関わりなどが数多く指摘され、活発な議論が行われた。また、各篇・各部単位について、編者の編集方針における感応縁の位置づけ、そこで表現したかった意図など、『法苑珠林』全書を通じての体例も徐々に明らかにしつつある。

その他の問題点も明確になってきている。第一には、版本の問題である。本書の校訂にあたっては高麗大蔵経本を定本としたが、宋磧砂大蔵経本、『四部叢刊』所収の明嘉興大蔵経本、我が国の寛文五年刊本などと厳密な対校を加えてきた。この結果、高麗本系統の版本のみ文字が異なり、しかも字句としては他本より優れないケースが多いことが明らかとなった。『法苑珠林』の版本の比較検討については、まだほかにも版本が数種存在するなどの事情もあり、次年度も引き続き考察を進めていくこととなる。

第二には、語彙の問題である。『冥祥記』佚文中に現れる語彙のなかには、仏教語彙と一般語彙とを問わず、語義が明確でないものが散見される。この点についても次年度以降、語彙史の観点からのさらなる研究が求められるであろう。

第三には、『法苑珠林』とそこに引用される仏教説話を通じての関連諸書との関係である。『冥祥記』は斉の王琰の撰になる書とされているが、『法苑珠林』が『冥祥記』を出典として引用する説話の中には斉以後のものも少なからずあり、混乱が認められる。また『冥祥記』の先行史料としての『光世音広験記』や、『冥祥記』が影響を与えたと思われる『高僧伝』などとの関係も注意を要する。それに『法苑珠林』と同時代もしくはそれ以後であるが、『太平広記』や『集神州三宝感通録』などと逸話が重複することも多い。これらの資料との関係については、既に勝村哲也氏に詳細な研究があるが、仏教説話研究の重要課題であり、定本策定にも大きく関わるので、さらなる明確化を要する。

本年度は「六道篇」「敬仏篇」「敬法篇」「敬僧篇」について、『冥祥記』佚文の検討を終えた。次年度は残る篇について速やかに校訂・訓読・語注を作成し、語彙索引を付した形でまとめたうえで、「感応縁」全体の検討に移る予定である。また上記に掲げた諸問題に関しても引き続き研究を行っていく予定である。

個人研究

安田理深「願生論ノート」  
の研究

研究代表者・助教授 加来 雄之  
(真宗学)

安田理深(1900~1982)は、昭和36(1961)年度より昭和41(1966)年度までの6年間にわたり大谷大学文学部において真宗学講義を担当した。安田がこの講義のために作った緻密なノート5冊が、没後、発見された。本研究の第一の目的は、それらの講義が親鸞教学にもつ位置を確認するとともに、それらのノート(以下、願生論ノート)を翻刻し公開することにある。

安田は世親教学を自らの生涯の研究課題とすると語っていた。よく知られるように「願生」という主題は、『浄土論』において世親が無量寿経の核心として掲げたものであるが、その主題を6年間にわたり展開したのがこの講義である。安田は、昭和36年・37年度に「願生浄土」、その後昭和41(1966)年度までは「願生論」というテーマで講義を行ったが、定年後非常勤として行った昭和41(1966)年度の講義を最後として病気のために職を辞した。講義は「願生」という主題で貫かれ、毎年新しい課題のもとにその主題を展開するものであった。その新しい課題は講義ノートにサブテーマと試験問題として掲げられている。これらを見るだけでも安田が願生という主題をどのような体系をもって取り扱おうとしたかを窺い知ることができる(表1参照)。もちろんどこまでも講義メモという性質上、実際の講義の内容が逐一丁寧に記されているわけではない。そのことは昭和36年度の講義ノートと仲野良俊による講義筆録、また昭和38年度の講

義ノートと講義録音テープとを比較すると明白である。しかしながらその意味でかえって願生論ノートは安田理深の思索の基本的骨格を伝えているといえよう。

これらの講義の思想的課題は、安田が属した宗教的伝統、とくに清沢満之、曾我量深、金子大栄らの近代親鸞教学の先人たちの課題でもあった「真宗仏教」の非神話化にあった(昭和36年度ノート)。昭和36年度の後期はほとんど唯識教学によって宗教心の「心」の概念を迷悟という人間のあり方を決定するような心、つまり心理学的以上の概念に引き上げるための作業に費やしている。そして人間存在の普遍的理解から真宗仏教を基礎づけるために選ばれたのが聖教の存在論的解釈であったといえよう。やがて安田は、「願生心の問題」について「人間の究極問題としての存在論的問題として、存在論的意義を明にしたいといふのが余の講義の意図する所である」(昭和38年度ノート)と述べ、「如来内存在」という独創性に富んだ概念を提起するのである。この「願生」という主題が安田理深の広く深く強靱な思索によって掘り下げられた記録がこの講義ノートなのである。安田は、この講義を単に啓蒙的なものとして考えずに、いわゆる曾我量深の「真宗学を基礎づける野心」(「金子先生を追憶して」)を継承するものとして位置づけていた。

安田が本学の非常勤講師として教鞭をとった昭和36年は親鸞の七〇〇回大遠忌にあたり、同年8月には、安田が師事した曾我量深が大谷大学学長となる。また翌昭和37年4月から安田は講師となり、同年7月からは同朋会運動という新しい形態をもった信仰運動が本格的に始まるなど大谷派が大きな転機を迎えつつあった。その意味で本講義は、単に安田個人のアカデミックな関心にとどまるものではなく、先にも述べたような新たな信仰運動がはじまろうとするその時にあたり近代親鸞教学を基礎付けるという課題をもってなされたというべきであろう。安田の大学や地方における講義などの活動を通して「願生」という主題は、若い学徒や末寺門信徒にまで広がり、大谷派の現代真宗教学の特徴づける概念ともなっ

(表1)

年度	講義テーマ	サブテーマ	試験問題
36	〔願生浄土〕	〔ナシ〕	真宗仏教に於ける宗教心に就て
37	続 願生浄土	〔ナシ〕	〔ナシ〕
38	願生論	1. 自覚 Das Erwachen aus einem wahn erwachen 2. 言葉 Die Sprache	名号の教学的意義について
39	願生論 続講	Das Wort und Sein 1. Die Heimat des Seins 2.	Vom der Sein des Reinen-Lands
40	願生論	願心莊嚴—存在と意味—	願心莊嚴(浄入願心章)の主旨
41	願生論	願生心	菩提心と願生心

てゆくのである。

最後に、願生論ノートを公開する意義について改めて確かめておきたい。安田理深には選集二十二巻をはじめ多くの著述が刊行されているが、これまでみずからによる組織的な著作はなかった。このことが安田の教学を体系的にとらえることを困難にしてきた。しかしこの度の願生論ノートの翻刻・公開を通して、安田の思索の体系的把握が可能になるであろう。(ただ病気による中断という事情を考えると、願生論が完結したかどうかは検討される必要があるが。)

一年間という限られた時間の中ではあったが、研究計画にしたがって以下の研究を行った。

- (1)願生論ノート全5冊の翻刻・校訂とデジタル・データ化。

これについては翻刻とデジタルデータ化はすべて終えた。現在も月一回のペースで本多弘之(親鸞仏教センター長)の指導のもとに検討会を重ねており、昭和39年度分までの校訂が終わっている。今回は、その成果の一端として、昭和36年度ノートについての翻刻・校訂・解題・注を『真宗総合研究所研究紀要』に掲載する予定である。

- (2)上記講義の現存録音テープの起しと未確認テープの調査収集と保存。

これらの講義については、現在昭和38年度講義のみについて録音テープが確認されている。それらは旧式のオープンリールによる録音という形態であり、今後の保存が危ぶまれたので、本研究班では真宗学会の協力と援助を受けてデジタルデータ化を行った。また併せてそれらのテープ起しを行った。録音では残されていなかった講義(昭和39年1月25日分)についても、今回の調査によって受講筆記録を発見できたので、昭和38年度の講義を再現することができた。それらの対応表も『真宗総合研究所研究紀要』に掲載する予定である。

- (3)相応学舎(京都北区京極寺内)所蔵の安田理深の諸資料と整理については研究途上であるが、安田理深の日記(1969年4月4日~1982年2月18日、全26冊)のデジタルデータ化また真宗大谷派長崎教区におけるにおける安居(会処、長崎教務所)の記録(テープと原稿)についての調査を終えた。

- (4)安田所蔵の未公開資料の整理については、研究計画であげておいた曾我量深の世親『浄土論』の講義記録(コピー)「浄土論賛」の翻刻・校訂を終えた。

以上の研究成果については随時公開していきたいと思う。

- (5)安田理深の年譜資料の収集と関係者に対するインタビ

ューは時間の関係で十分に行えなかったが、以下の人々に行った。(伊東慧明・加来玄雄・虎頭祐正・広瀬泉・本多弘之・森智定)

## 学会参加報告

# 第11回国際チベット学会参加報告

西藏文献研究 研究員 三宅伸一郎

西藏文献研究班研究員・白館戒雲教授、同囑託研究員・井内真帆氏に三宅を加えた3名は、ボン大学の中央アジア講座 (Zentralasiatisches Seminar, Universität Bonn) がホストとなって、ドイツ・ケーニヒスヴィンターにあるホテル・マリタイム (Hotel Maritim) を会場として2006年8月27日から9月2日までの間開催された、第11回国際チベット学会 (11th Seminar of the International Association for Tibetan Studies) に参加した。

参加者リストには300を超える研究者が名を連ねていた。研究発表は、36のパネルに分かれておこなわれた。全体的な傾向として、仏教教義学に関する発表は減少し、社会学・文化人類学的な手法を用いた研究が目立つようになった。また、中国内在住のチベット人研究者の参加が増加しているのも目立つ。

大会期間中は、連日9時より17時ごろ (終了時間はパネルにより違いがある) まで研究発表がおこなわれた。1人の発表持ち時間は、質疑応答含め30分。途中、12時30分~14時まで昼食の時間、10時30分、15時30分よりそれぞれ30分間ティー・ブレイクの時間が設けられた。また、毎晩、記録映画上映等のイベントがおこなわれた。そのような中で、出張者は、各国から参加した研究者たちとの交流を深めるとともに、以下のごとき研究発表をおこなった。

白館氏は、30日、パネル24 (Panel 24: Tibetan Philology, Linguistics and Lexicography) にて、「Bod kyis sgra snyan ngag 'phel rgyas dang bdag dang 'khrungs yul gcig pai dpang lo (1276-1342) (チベット声明学・詩学の発展と私と同郷のパンロ)」と題し、チベットにおける声明学および詩学の発展を概観しながら、そこで大きな役割を果たしたのは、パン翻訳師ロドー・テンバ (dPang lo tsā ba Blo gros brtan pa, 1276-1342) やショントン・ドジェ・ギェンツェン (Shong ston rdo rje rgyal mtshan) をはじめとする中央チベット西部トー (sTod) 地方出身者であること、発展地もそこであることを指摘した。また、詩学で現在もその著作が重要視されるプー・ケーワ (Bod mkhas pa Mi pham dge legs rnam rgyal, 1618-1685) は、本来ボン (Bong) 出身の賢者 (ケーワ, mkhas pa) という意味のボン・ケーワであったのが、後、

ポンの添後字 ng が字形が類似している d と間違えられ、現在のように称せられるようになったという指摘は、彼と同郷であり、地元の地理に精通しておられる氏ならではのものであった。

井内氏は、30日、パネル25 (Panel 25: Old Tibetan Studies) において “bKa' gdams pa - manuscripts discovered at Khara-Khoto



発表中の白館氏

in the Stein Collection (スタイン収集カラホト出土のカダム派写本)”と題する発表をおこなった。20世紀初頭、西夏王国により造営された黒水城 (カラホト) の遺跡より出土した西夏語、チベット語、中国語、モンゴル語等の言語で書かれた文献群中、スタインが収集し、現在大英図書館の Oriental and Indian Office に所蔵されている1056点を数えるチベット語写本断片は、彼がその著 *Innermost Asia* (1928) で紹介しているだけであり、本格的な研究はなかった。井内氏はこうした手付かずの状態であった写本断片に挑み、その中にカダム派の祖師たちの名前とその教えを見だし、それらはいわゆる「説法小品集 (gsung thor bu)」の一部ではないかと指摘した。

三宅は、29日に、パネル22 (Panel 22: Old Treasures, New Discoveries: Sharing materials which have recently come to light) において “Ō tha ni gtsug lag slob chen gyi bod yig dpe mnying zhib 'jug skor (大谷大学のチベット古写本研究について)”と題し、大谷大学図書館所蔵のチベット語文献将来の由来、寺本婉雅 (1872-1940) の業績、および稀観本の紹介をおこなった。

なお、1日におこなわれた総会で次期会長にオックスフォード大学の Charles Ramble 氏が選出された。

# 第11回国際真宗学会欧州地区大会参加報告

国際仏教研究班 田村 晃徳

今、私の手元には新聞の切り抜きがある。日付は1996年12月12日。切り抜いてから10年を数えるその記事には「ヨーロッパの浄土真宗」と題して大峯顕先生が寄稿されていた。ヨーロッパにおいて、浄土真宗がどのように受け入れられているかについて書かれていたその記事には、ドイツのデュッセルドルフに開設されている「恵光」日本文化センターが紹介されていた。当時、博士課程だった私は興味深くその記事を読みながらも、自分が行くとはもちろん考えていなかった。ところが、この夏、その地に向かい、学会に参加する事となったのだから、わからないものである。

1993年に開設された同センターは仏教寺院（浄土真宗本願寺派恵光寺）、日本庭園、書院造りの日本家屋などからなっていた。いずれの施設もきれいに整備されており、日本の観光地のようであった。



恵光寺

今回の「第11回国際真宗学会欧州地区大会」(11th European Block Conference of the International Association of Shin Buddhist Studies) (以下「大会」と略記)は、The 14th Shin Conferenceの一環として開催された。Part Iが8月22日に開催された同大会と、翌23日に開催されたライン川下りであり、Part IIが24—25日にかけて行われた「欧州真宗者会議」(Conference of European Shinshū Communities)である。私は「大会」にのみ参加してきた。

「大会」は“The Shin Buddhist View of Life and Death”

を統一テーマとして、各発表が行われた。発表者と題目は以下の通りである。

Ishida, Hoyu: “The Seventh Step in the World of Duhkha”

Wu, Cao-Ti: “Shandao’s View of the Pure Land: - With a Focus on his Thought on Life and Death”

Grumbach, Lisa: “The Reception of the Nembutsu Teaching in Kamakura Period Japan”

Arai, Toshikazu: “Shinran’s View of Transmigration”

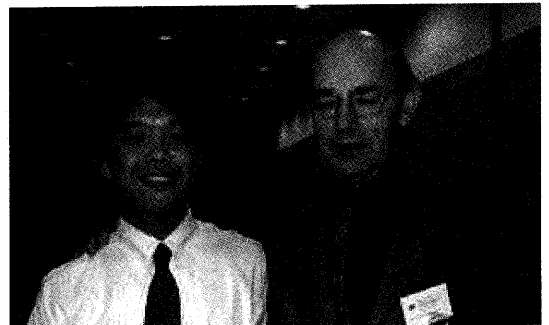
Kashiwahara, Nobuyuki: “Nembutsu for Myself and for Another”

Mullen, Kenneth: “Positive Aging in the UK and Japan: The Jōdo Shinshū Contribution”

Van Parijs: “Shifting Perspectives on Death”

そして夜には“Evening Service Sambutsuge”が行われた。

各発表の内容についての詳細は、残念ながら紙幅の都合で割愛せざるをえない。だがいずれの発表にも活発な質疑が行われ、有意義な発表であったことは間違いない。Positive Agingの話など、日本ではあまり見られないテーマなので興味深く聞いていた。先生方とも知り合いになる機会があり、有益な学会参加であった。



上智大学のO’leary先生（向かって右）と筆者

# 日本心理臨床学会第25回大会参加報告

一般研究廣瀬班 代表 廣瀬 幸市

日本心理臨床学会は、1982年に設立され、2006年4月現在、正・準会員合わせて17,559名が所属する、日本の心理学関連学界の中で最大の学会である。主な活動として、機関紙・会報の発行や大会開催以外に、大学院生のための研究集会、心理臨床に関する国際交流、心理臨床のためのカリキュラムの検討など、心理臨床に関係するあらゆる活動のための研究・研修・活動支援を行っている。

また、第25回大会は四半世紀となる大会と位置づけられ、会場となった関西大学も開学120周年の年に当たり、広大な千里丘キャンパスの端から端までを提供した後方支援も幸いし、9/18総会での報告によると、8,300名の参加という過去最大規模の大会となった。

この大会に本研究班が参加するに当たっては、研究発表という形での参加が最も得るものが多いと判断し、事前に発表申込を済ませておいた。プログラム日程2日目9/16に、本研究班は「場所論的心理療法モデルについての研究(2)——オートポイエーシスとの関連から——」という題名で研究発表を行った。最初にそのことについて述べることにする。

報告者は昨年、同学会第24回大会において、心理臨床学の共通理解のための共通基盤として場所論的心理療法モデルを発表した。この時、場所論的心理療法モデルから見た心理療法を「それ自身の弁証法的運動によって『行為的直観』的に進み行く無限の運動」と提唱したが、これは、クライアントとセラピストを含んだ心理療法自体を一つのシステムと捉える視点を提示したことと同等である。このようにして捉えられた「心理療法システム」は、社会学者N・ルーマンがオートポイエーシス論に大幅な解釈上の飛躍を行った社会システム論に言うところの、コミュニケーションを産出し続けるオートポイエーシス・システムであると見做せる。原理における比較と実践における比較・考察を通して、場所論的心理療法モデルによって捉えられた心理療法システムはオートポイエーシスの精髓全てを含有していると結論した。但し、オートポイエーシス・システムは、生態、環境、認知、科学、社会、法、文学など広範な経験科学へと適応可能なシステム論であり、それに対して場所論的心理

療法モデルは、先の経験科学のうち、心理療法という特殊領域に適合したシステム論であると付言した。

本研究発表には予想を超える参加者が来られて、熱心に聴かれた上で質問をされた。全てを記載することはできないが、例えば「オートポイエーシスから捉え直された心理療法は新しい技法を提供するのか?」「心理療法を生命論から源を發して説明することは納得がいく」

「発表された視点は心理臨床実践に限らず、他の心理学領域でも当てはまるものではないか?」等の質問・感想・コメントであった。発表者である報告者自身、質問を受けて大いに刺激を受けると共に、今後の研究の方向性を考える一助を得た。更には、会場で発表を聴講していた出版関係者から今後の出版計画を打診されるといふ副産物もついてきた。

同日、本研究発表の後の時間帯に企画されていた自主シンポ部門において、「心理臨床における『観察主体』」の部会に参加した。シンポジウムの企画・話題提供者の藤見幸雄・岸本寛史・森岡正芳諸氏は、報告者とは異なるアプローチで研究を進めているその領域の第一人者である。彼らの討論しているテーマは、「観察自我」「観の目」と呼び習わされてきた、自我主体を脱同一化する立脚点であり、自我と無意識の両者をコンテインする統合的ポジションでもあり、治療においては極めて重要な局面に現れる微細な事態であるので、議論は不可避免的に高度で難解であったが、熱気がこちらの研究熱に影響する豊穡なものであった。フロアを含む議論の時間には、話題提供者による計らいで、思いがけず会場で自説を一部開陳する機会が得られた。

次に、時間の流れは前後するが、大会初日9/15のワークショップ部門で参加した「プロセス心理学の心理臨床」というプログラム内容について報告する。プロセス指向心理学は、理論物理学を専攻したミンデル・Aがコミュニケーション理論やタオイズムに影響されながらもユング心理学の精髓を継承したものである。彼が提唱した、夢と身体との間の共時的関係性を指すドリームボディは、本研究班が研究を進めていく上で参考になる重要な概念である。これは、文献から直接学ぶのが困難なものであり、実習などを通して身体を含めた統合的学習



を要請される。今回のワークショップで扱われたドリームワークは、単なる座学では学び得ない多様さとリアリティを伝えていた。参加者同士が実際に行う実習が、自らの体験を通してドリームボディが反映されている様を実感させ、その学習を大いに助けていた。

本大会においては、学会員の一人として参加した事例研究やシンポジウムなど、まだ触れていない多くのプログラムがあるが、本研究班の研究に直接関係するものに限って本報告とする趣旨からは少しずれるので、今回は割愛することとする。

大会最終日の総会において第3号議案として検討された、次年度第26回大会の開催については、諸般の事情により今年度と同等規模の開催は不可能であるとされた。また、学会員数が来年度2万人を超えることが確実視されている状況下では、次年度以降の大会においても、一堂に会しての開催自体を再検討する必要性が指摘された。このような状況にあったという意味においても、本年度に研究発表で参加したことは誠に時宜を得たものであったと改めて思う次第である。

## 研究調査出張報告

# 中国・東北師範大学との共同研究調査報告

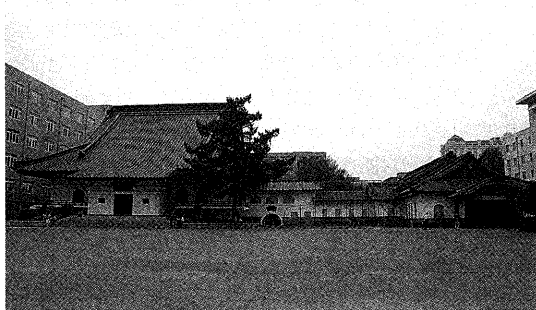
国際仏教研究 研究員 桂華 淳祥  
国際仏教研究 研究員 松川 節

本年8月、本学真宗総合研究所国際仏教研究班と中国・東北師範大学との共同研究「中国東北・東部モンゴル地域の宗教と文化」の一環として、木場明志本学教授、桂華淳祥本学教授、松川節本学助教授の3名は、中国の北京、長春、吉林省北部と内モンゴル東部において現地調査を行った。

8月24日(木) 木場、桂華は関西国際空港から出国し、空路にて北京へ。モンゴル国での調査を終えて北京入りした松川が合流し、ホテルにチェックインした後、中国社会科学院歴史研究所研究員のオヨンゴア(烏雲高娃)女史の案内で、牛街の法源寺・礼拝寺を見学。法源寺では金代～モンゴル帝国期に活躍した海雲禪師の行状碑「大慶壽寺西堂海雲大禪師碑」を実見。その後、オヨン

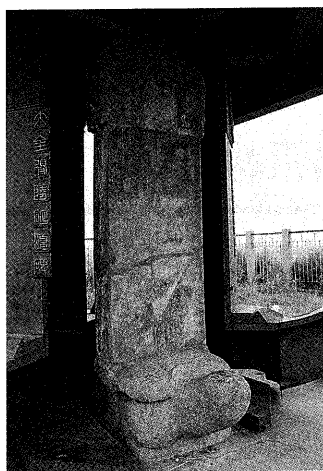
ゴア女史の他、中国人民大学国学研究院主任の沈衛榮氏、中国仏教協会国際部日本科科長・中国仏学院非常勤講師の李賀敏氏を招いて、東北地方及び内モンゴル自治区における中国仏教・チベット仏教の現状と、それに関する宗教施設の現況について情報の提供を受ける。

8月25日(金) 北京から空路にて長春へ。到着後、市内の般若寺を見学。1923年にこの寺を創建した倭虚衛公大師の霊塔を実見。その後、本研究班の東北師範大学側研究員程舒偉氏、曲曉範氏、劉景嵐女史、林嵐女史とともに各自の研究状況や新たな課題について懇談し、今後も共同研究を継続していくことで合意した。市内のホテル泊。



真宗大谷派満洲別院

8月26日(土) 本日より現地調査へ。全行程、日本語が堪能な林嵐女史が同道。07:30ホテル発。まず、長春市内の真宗大谷派満洲別院を見学。現在は「第二実験中学」として使われている。その後、長春市から高速道路で北上し、扶余県を経由して松原市へ。ここで松原市地方税務局局長の安仲弟氏と合流し、道案内していただく。11:20、吉林省扶余県伊家店郷石碑村に所在する「大金得勝陀頌碑」に到着。見学及び調査。この地は、金の太祖ワンヤン＝アクダが遼軍と戦うために挙兵し、部下の将士に諭告・誓約をあたえた場所であり、碑は、金の第5代の世宗が大定25(西暦1185)年に祖宗の戦勝を記念して立石した。碑陽が漢文、碑陰は女真文である。田村實造「大金得勝陀頌碑の研究—女真文と漢文の訳解—」(1936年)をはじめ、中国においても諸々の解説研究がなされている。1961年に吉林省重点文物保护单位の指定を受け、1983年に碑亭が造られた。碑石は鋳物でできた金属板で完全に覆われており、あたかも鎧を纏っ



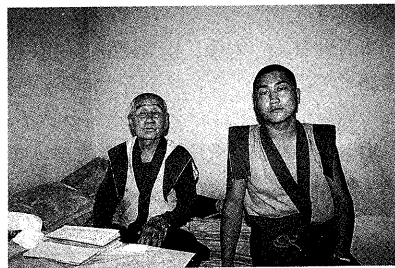
大金得勝陀頌碑

ているかのよう。碑面を実見できたのは幸いであったが、田村氏が発表した京都大学所蔵拓本の拓影と比較しても、女真文面は相当磨耗が進んでいることがわかった。午後、吉林省松原市を経由して西行し、チャガン(查干)湖畔へ。松原市は前ゴルロス・モンゴル族自治縣と接しており、チャガン湖畔にはモンゴル族「民俗村」という巨大な観光施設ができていた。その一角に妙因寺というモンゴル仏教寺院があり、これを見学・調査。妙因寺はモンゴル名 *γayiqamsiytu ündüsülegçi süm-e*、チベット名を *ngo mtshar rgyud 'zhin gling* と言う。乾隆40(1775)年の創建。モンゴル族の83歳になる住持より現況を聞く。妙因寺を出て進路を西に取ると、周囲はヒマワリ畑から次第に何も栽培されていない荒野へと景色を変える。吉林省白城市に至り、市内のホテル泊。

8月27日(日) 西北に進み、内モンゴル自治区に入る。草原が目に入ったのもつかの間、大興安嶺の南麓に差しかかり、森林地帯が広がり始める。09:20、ゲゲーン(葛根)廟に到着。見学と調査。このゲゲーン廟はモンゴル仏教寺院で、乾隆13(1748)年に梵通寺という寺額を賜ったのが創建。住持が多忙で面会できないため、先にウラーンホト(烏蘭浩特)市に移動し、成吉思汗廟の見学と調査を行う。成吉思汗廟は、1944年、当時の満洲国興安省王爺廟に日本軍によって建立されたもので、中日折衷様式で造られ、モンゴル人のもつチンギスハン崇拜を、八紘一字の大東亜建設の一部として取り込もうとする意図があった。この地をモンゴルの聖地とする計画は終戦によって沙汰止みとなり、その後、成吉思汗廟は文化大革命によって大規模な破壊を蒙るが、1983年から再建が始まり、1987年に完了、2004年には国家級文物保护单位の指定を受け、今や一大観光地と化している。廟内には小さな展示施設があり、そこには文化大革命時に破壊された本廟の写真が展示されていた。

午後 ゲゲーン廟にもどり、地元の人に尋ねながら付近の歴史遺跡の調査。引き続き吉林省白城市華嚴寺の見学・調査。深夜、長春市内のホテルに帰還。

8月28日(月) 終日、長春市内にて日本神武殿旧址、満洲国帝宮旧址、満洲国國務院旧址など、満洲国時代の歴史遺跡を見学・調査。また書店にて資料収集。その後、





ゲゲン（葛根）廟

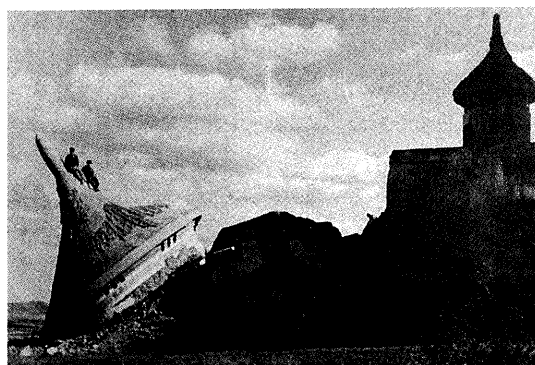
今秋に本学にて史料調査予定のある曲曉範氏、劉景嵐女史、林嵐女史とともに、その時の課題および今後の研究継続のための交流方法について打ち合わせをする。

8月29日(火) 長春発。空路北京へ。北京空港で解散し、木場・桂華は空路関西空港へ帰途につき、松川は次の調査地、内モンゴルのフフホトに向かった。

駆け足ではあったが、今般の調査により、中国東北地域と東部モンゴル地域における中国仏教寺院、チベット・モンゴル仏教寺院の現況について了解することができた。一般に、内モンゴル自治区内のチベット・モンゴル仏教寺院の概況については、ここ10年ほどのあいだに複数の調査報告が中国で、また日本で出されているが、いわゆる東北三省（吉林省、遼寧省、黒竜江省）のチベット・モンゴル仏教寺院については、その概況さえも報告されていないのが現状である。今回の調査で、吉林省松原市の妙因寺に住持する83歳のモンゴル僧より、満洲国時代におけるこの地域の宗教事情を聞くことができたことは、大きな収穫であった。また、この松原市に隣接する前ゴルロス・モンゴル族自治縣には、モンゴル族のシャマンが今でも活動しているという情報を得ていたが、今回は接触することができなかった。東部モンゴル地域における諸宗教の混交形態を解明する上で、シャマニズムをも視野に含めて研究・調査することを今後の課題としたい。



現在の成吉思汗廟



文化大革命時に破壊された成吉思汗廟

# 「蓮如：現代日本仏教のルーツ」出版について

## 『蓮如：現代日本仏教のルーツ』 出版・記念祝賀会報告

教授 安富 信哉

真宗総合研究所では、『蓮如：現代日本仏教のルーツ』(Rennyō and the Roots of Modern Japanese Buddhism)の出版祝賀会を、この夏に催した。本書の編集に携わった者として、出版の経緯と当日の祝賀会についてご報告したい。

そもそもこの本の出版は、1998年6月、大谷大学を会場として開催された「第48回・日本印度学仏教学会・学術大会」に由来する。ちょうど蓮如上人500回忌と重なり、研究者による蓮如に関する特別部会が開かれ多くの発表があった。

この特別部会では、蓮如上人を、日本人の視点からだけでなく、欧米人の視点からみることも大切ではないか、ということで、欧米の研究者の発表も歓迎した。

そして、この特別部会の発表をひとつの機縁として、真宗総合研究所から『蓮如の世界』と題して、分厚い研究書が刊行された。

国際仏教研究班では、記念出版の『蓮如の世界』に掲載された、日本の、そして欧米の研究者による論文などを中心に、海外で紹介したい内容のペーパーを数点を選んで、英語による蓮如の研究書を出版するというプロジェクトを立ち上げた。当時、学長は、訓覇暉雄先生で、研究所の所長は、友田孝興先生であった。私たち国際仏教研究班の計画に賛同し、ご理解を示された。

ただ、英文の書物は、マーケットの点からすれば、海外の出版社から刊行するのが好ましい。「嘱託研究員」のマーク・ブラム先生に打診していただいた結果、幸いに、オックスフォード大学出版部(本部 ニューヨーク)と出版契約書を交わすことができた。これを受けて編集作業に入った。翻訳者の方々にはご面倒をかけたが、その他のことでも研究班のロバート・ローズ先生をはじめ、諸方にご協力を仰いだ。

以来、8年ほどの歳月がかかってしまったが、お陰さまをもって、本年の1月に、美しい装丁の、また品格もった書物としてようやく完成した。

本書の出版にいたるまでの経緯は、だいたい以上のとおりであるが、本書の出版祝賀会は、さる7月28日(金)の夕刻から、京都御苑の木立を臨む京都ガーデンパレスを会場として、木村宣彰学長、兵藤一夫研究所長をはじめ、35名のご出席をいただいて開催され、つぎの方々が挨拶された。

- ・ 開会挨拶 ……………兵藤 一夫 (研究所長)
- ・ 出版の意義と経過説明 ……マーク・ブラム  
(編集責任者、ニューヨーク州立大学準教授)
- ・ 執筆者・翻訳者紹介 ……安富 信哉  
(編集責任者、本学教授)
- ・ 挨拶 ……………木村 宣彰 (本学学長)
- ・ 乾杯 ……………ヤン・ヴァン・ブラフト  
(南山大学名誉教授)
- ・ 執筆者挨拶 ……………池田 勇諦  
(同朋大学名誉教授)
- 寺川 俊昭  
(本学名誉教授)
- 訓覇 暉雄  
(本学名誉教授)
- 金龍 静  
(本願寺史料研究所副所長)
- ・ 翻訳者挨拶 ……………トーマス・カシュナー  
(花園大学国際仏教研究禅学研究所研究員)
- ・ 閉会挨拶 ……………安富 信哉

なお、司会・進行は、浅見直一郎研究所主事が担当し、出席者は、それぞれの方々の挨拶に耳をかたむけ、記念写真撮影をはさんで終始なごやかな雰囲気のもと歓談した。

本書の出版にご協力いただいた関係者、そして本書の出版祝賀会を催してくださった真宗総合研究所、またこの会にわざわざ足をお運びくださった皆さまに改めてお礼申しあげたい。

# 真宗総合研究所彙報 2006.5.1～2006.9.30

## ■研究所関係

### ◎真宗総合研究所委員会

- ◇6月13日(火) 12時10分～(博綜館5階第4会議室)
1. 2006(平成18)年度「一般研究」の研究計画の一部変更について
  2. その他
- ◇9月27日(水) 12時10分～(博綜館5階第4会議室)
1. 2007(平成19)年度「一般研究」の募集について
  2. その他

- 「蓮如：現代日本仏教のルーツ」出版記念祝賀会
- ◇7月28日(金) 18時30分～(京都ガーデンパレス)

## ■指定研究

### 大谷大学親鸞聖人750回御遠忌記念特別指定研究

- ◇5月25日(木) 16:10～17:40  
(真宗総合研究所ミーティングルーム)

#### 第5回研究会

- ・第3回公開研究会(講演)の開催について
- ・今後の公開研究会について
- ・研究成果の公開について
- ・文献目録作成の進捗状況と今後の方針の確認

- ◇6月14日(水) 16:00～17:50(尋源館2F講堂)

#### 第3回公開研究会(講演)

平雅行氏(嘱託研究員・大阪大学大学院教授)  
「善鸞義絶状と偽作説」

- ◇7月26日(水) 16:00～17:40  
(真宗総合研究所ミーティングルーム)

#### 第6回研究会

- ・第4回公開研究会(講演)の開催について
- ・『真宗総合研究所研究紀要』第24号掲載内容について

なお、上記研究会の他、文献目録作成のためのパート会議並びに作業を行った。場所、日時は以下の通りである。

場所：真宗総合研究所 御遠忌記念特別指定研究班

日時：・5月10日(木) 15:00～  
・5月25日(木) 13:00～  
・7月20日(木) 13:00～  
・9月8日(金) 14:00～  
・9月15日(金) 10:00～  
・9月26日(火) 16:00～

## 大学史研究

### 《作業連絡会議》

- ◇5月22日(月) 16:30～18:00  
(真宗総合研究所ミーティングルーム)
- ◇6月29日(木) 16:30～18:00(同上)
- ◇7月25日(火) 16:00～17:15(同上)
- ◇8月31日(木) 16:20～17:30(同上)
- ◇9月26日(火) 16:20～17:00(同上)

### 《『注釈 臘扇記』編集会議》

- ◇5月10日(水) 第二回  
(真宗総合研究所オープンスペース)
- ◇5月17日(水) 第三回(同上)
- ◇5月31日(水) 第四回(同上)
- ◇6月7日(水) 第五回(同上)
- ◇6月14日(水) 第六回(同上)
- ◇6月21日(水) 第七回(同上)
- ◇6月28日(水) 第八回(同上)
- ◇7月5日(水) 第九回(同上)
- ◇7月12日(水) 第十回(同上)
- ◇7月19日(水) 第十一回(同上)
- ◇7月26日(水) 第十二回(同上)
- ◇8月2日(水) 第十三回(同上)
- ◇8月3日(水) 第十四回(同上)
- ◇8月21日(火) 第十五回(同上)
- ◇8月22日(火) 第十六回(同上)
- ◇8月28日(月) 第十七回(同上)
- ◇8月31日(木) 第十八回(同上)
- ◇9月4日(月) 第十九回(同上)
- ◇9月6日(水) 第二十回(同上)
- ◇9月13日(水) 第二十一回(同上)
- ◇9月19日(火) 第二十二回(同上)
- ◇9月27日(水) 第二十三回(同上)

### 《他研究機関における大学史研究・大学史史料室に関する研究会》

- ◇5月30日  
全国大学史資料協議会西日本部会 第一回研究会  
(龍谷大学大宮学舎会議室)
- (参加者：東館紹見<研究員>、加藤基樹<研究補助員>、日野圭悟<研究補助員>)

### 《清沢満之『注釈臘扇記』(仮称)検討会(1)》

- ◇2006年9月20日 10:00～12:00

(真宗総合研究所ミーティングルーム)

『臘扇記』における国語表現等の取り扱いについて

(参加者：沙加戸弘く本学教授)、天野勝重く本学講師)、織田顕祐くチーフ)、東館紹見く研究員)、加来雄之く研究員)、西本祐攝く研究員)、日野圭悟く研究補助員)

《大谷大学図書館貴重書閲覧室における調査》

◇2006年6月23、30日、7月7、14、21日、9月8、15日  
香月院深励関係書籍調査

(調査者：加藤基樹く研究補助員)、藤井学くアルバイト)、香月拓くアルバイト)

大学史研究では、先年度に引き続き『清沢満之全集』未収録文献の翻刻、テキストデータの校正などの事後処理、佐々木月樵研究のための資料調査収集、近世学寮年表の作成研究と大学史資料原本ならびに写真資料の再調査・長期保管作業、所蔵紙焼き資料の整理、東本願寺教団現代史の調査研究などの研究課題について、それらに関する調査・整理作業のほか、史料の閲覧・貸出や質問などへの対応など日常業務として行った。

国際仏教研究

〈英語班〉

①2006年6月13日 9:15~

(真宗総合研究所ミーティングルーム)

2006年10月6日(金)~7日(土)に開催される、南都仏教会について打ち合わせをした。発表者、ならびに題目などの確認を行った。

②2006年7月27日 14:00~

(真宗総合研究所ミーティングルーム)

Mark Blum 先生をお迎えして、“An Anthology of Modern Shin Buddhist Writings”の進行状況について確認。ピブリオグラフィーの作成方法を確認した。また、目次を決め、序文などの担当者を確認した。

〈ドイツ班〉

①2006年7月27日(木) 13:30~

(真宗総合研究所ミーティングルーム)

フランス国立高等研究院とのシンポジウム「宗教と近代合理的精神——日仏文化の比較をとおして」(2006年11月30日、12月1日開催)の打ち合わせをし、本学側の発表者の発表計画を検討した。

井上尚美 “No Hell Below Us : Twilight of Religious Cosmology and Modernization of Japan” (地獄の喪

失：宗教的宇宙観の衰退と日本の近代化)

〈中国班〉

①大谷大学図書館所蔵真宗大谷派海外布教資料の目録作成

4月 旧満洲関連の綴資料(仮番号8・9)の目録作成作業を継続中。

②中国東北師範大学との共同研究「中国東北・東部モンゴル地域の宗教と文化」

8月24日(木)~29日(火)、桂華、松川の研究員2名は、木場明志本学教授と共に中国東北師範大学(長春)を訪問。中国側参加者とともに、吉林省の長春・松原、内蒙古自治区の烏蘭浩特、葛根廟にて共同現地調査を実施した。

西藏文献研究

《研究打ち合わせ》

◇2006年5月11日(木) 12:10~12:50

チベット語訳『縁起分別釈』入力作業の分担を決定。

◇2006年7月6日(木) 12:10~12:50

チベット語訳『縁起分別釈』校正作業の分担を決定。

《海外出張》

◇2006年8月7日(金)~11日(金)

嘱託研究員・野村正次郎氏を TLK 開発作業に関連してサンフランシスコに派遣。

嘱託研究員 Steve Hertwell 氏と打ち合わせ。World Wide Developer Conference に参加。

◇2006年8月26日(土)~9月3日(月)

研究員・白館戒雲、三宅伸一郎、嘱託研究員・井内真帆をドイツに派遣。

ケーニヒスヴィンターで8月28日から9月1日まで開催された第11回国際チベット学会に参加。研究発表。

真宗本廟(東本願寺)造営史研究

真宗本廟(東本願寺)造営史の全体像把握のための史料調査、史料翻刻、および国内調査等、それぞれの進捗状況について報告。今後の作業課題、研究活動について検討。

《事務連絡会議》

◇4月28日(金) 16:10~17:40

(真宗総合研究所真宗本廟造営史研究班デスク)

議題：造営史研究班の研究方針と内容の策定、事務連絡網の確認、その他

◇5月26日(金) 14:30~16:00

(同上)

議題：アルバイト体制、その他

◇6月23日(金) 16:10~17:40 (同上)

議題：第1回全体会議の事前確認、その他

◇7月14日(金) 16:10~17:40 (同上)

議題：史料調査・収集の現状と計画、その他

◇9月29日(金) 16:10~17:40 (同上)

議題：史料調査報告(名古屋別院・暮戸教会等)、本年度後期の研究計画、その他

#### 《全体会議》

第1回全体会議

◇6月27日(金) 17:00~18:30

(真宗総合研究所ミーティングルーム)

議題：造営史研究班設立の経過、研究計画面案、今年度の方針、その他

参加者：兵藤一夫(大谷大学真宗総合学術センター長・兼真宗総合研究所長)、浅見直一郎(同主事)、宮浦一郎(宗祖親鸞聖人750回御遠忌本部事務室事務部長)、下野真人(同次長)、近松誉(同主事)、伊藤延男(真宗本廟(東本願寺)造営史研究嘱託研究員)、永井規男(同)、山岸常人(同)、江上琢成(同)、登谷伸宏(同)、木場明志(同研究員)、平野寿則(同)、大谷めぐみ(研究補助員)。

#### 《調査》

◇8月30日(休)・31日(休)

名古屋別院所蔵『名古屋工作場記録』

三河暮戸会所蔵『三河大谷派記録』等の調査

参加者：木場明志(研究員)、平野寿則(同)、安藤弥(嘱託研究員)、大谷めぐみ(研究補助員)。

研 究 所 報 第 49 号

2006年10月1日 発行

編集発行 大谷大学真宗総合研究所

〒603-8143 京都市北区小山上総町

Tel. 075-411-8498 Fax. 075-411-8435